次の二篇は長野縣長野尋常小學校訓導鷲江八重吉及中村多重の二氏が明治二十三年來繼續して倦まず屈せず子守教育に從事して研究し得たる結果なり。鷲江氏は高等師範出身にして長野市有名の教育者たりしが、不幸肺患の爲に昨年死去せられたり。此稿同氏が長野市尋常小學校に盲啞學校を附設せんとて同校教員を東京盲啞學校に見習に推薦したる關山國雄氏より得たるものなり。

小西信八誌

嬰兒の泣き方に就きての研究

(一)眼をあき涙を澤山だして泣くのは

からだにいたみ所のある時か、ふなかのいたい時であります、此場合には背より下してからだを改めてそれぞれに手當をしてくれなくてはなりません。

(二)眼をあき涙を出さず、頭を左右に動しながら泣くのは

背負はれ方が窮屈なるか、又は其居り場所に飽きたのであります。

此場合には子守の背より下して抱くか、或は工合よく負ひかへさせて窓を開き、外景を見せるか、又は外へつれ出すが宜しくあります。

(三)眼をあき涙を少々出して、こじつけた樣な聲をして泣くのは

ふ臀にあてゝあるものが工合惡きのか、又はぬれて樣子のわるいのであります。

此場合には直く下して、あてゝあるものをあてかえるか、又は乾いたのと取かへなければなりません。

(四)眼をあき涙を出さずして少しづゝ間を置きて、ふしをつけ此間をおきふしをつける時に眼を細めて泣くのは

空腹なるか又はのんとのかわいたのであります。

此場合には湯をさまし與へるか、又は家にかへして乳を與へなければなりません。

(五)眼を細めるか、又眼の中に少しくうるみを持ち力なく音調を亂して泣くのは眠氣の催した時であります

此場合にはぐら〳〵しないやうに負ひかへさせ頭巾をぬがせて頭を靜かになぜるがよくあります。

(六)眼をあき涙を出さずして眼中に少しく光をおび手足をもがき、全身に力を入れて泣くのは、身体の發育上必要があつて泣くのであります。

此場合には十分か十五分位は其まゝおきて、音の低きを度として子守の背より下して抱くか、再び負ひかへさせて嬰兒の背を輕くぽん〳〵たゝいてくれるがよくあります。

嬰兒負ひ方の注意

結びつけ負ひ方に就きてのおびは長さ九尺の天笠大幅木綿を用ふるを尤も好しとす。

此おびを嬰兒の背より左右の腋下にとりて子守の双肩に懸くる所は成るべく緩め置くべし。

それより子守の胸の前にて一つ結び後へまわし嬰兒の臀部に掛くる所はおびを擴げておの臀を包み適宜しつかとしめて前に廻し結ぶべし。

上部を緩め置くは胸部を壓迫せぬ爲めにして、下部を緊縛するはずり下らぬ爲めなり。

此くの如くせば嬰兒は臀部を以て腰を掛けたる如くせば、上体は稍自由に動し得る樣になるべし。